
ねーじゅ

すずね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねーじゅ

【Nコード】

N7482K

【作者名】

すずね

【あらすじ】

高校生と先生の恋愛小説。

日差し

音樹 って、書いてねーじゅって、読む。

それが、あたしの名前。

フランス語で雪って意味らしい。

それで、あたしは白がすき。

パールホワイトってカラー名の携帯が、掌で振動している。

メールだ。

あたしが、昇降口に入ると同時にメールが来たってことは、スイセイがどこかでみてたのかもしれない。

スイセイっていうのは、あたしの恋人の名前。

本当は、「清」っていう、味も素っ気もないツマンナイ名前。

偏とつくりを分解して、「水青」。これで、スイセイって読むことにした。

「なんだかな」

と、腑に落ちない顔をしてたけど、二人っきりのとき限定で、あたしはスイセイって呼んでいる。

『進学指導室においで』

メールにはそう書いてあった。

進路指導室っていうのは、進学関係の雑誌なんか置いてある部屋で、普通の教室の四分の一くらいの広さなの。

今日は、あたしたちそこでずっと過ごすんだわ。

胸がときどきした。

そのときどきする胸は、たった一枚小さな下着を着用しなかっただけで、すーすーして心もなかった。

歩きたびに、ふるふると振るえ、ちいさな先がレースのキャミソールにこすれている。

歩いているだけで、先が固くなっていくのがわかった。

それは、物理的にこすれた刺激のせいだけじゃなくて、これからの期待のせいでもあった。

「でも、何もされてないのに固くなっていたら、みだらだともわれるんじゃないかしら？」

あたしは、不安もいだいていた。

胸が揺れないように、制服の上から強く胸を抑えて歩き出した。

春の日差しは暖かく、桜は満開だった。

あさって、満開の桜並木を新入生がくぐることになる。

その入学式の準備をしているスイセイの手伝いをしにきたのである。

「スイセイ。おはよう」

進路指導室のドアをあけながら、あたしは挨拶した。

「しい」

スイセイが、指をたてて静かにするように促す。

「ここでは、『先生』だろ」

と、言った。

「他に人がいないもん。いいじゃない」

ドアを閉めながらあたしは、口を尖らせながら拗ねてみた。

「廊下って、結構ひびくんだよ。ドアをしめてからじゃないとダメだ」

そう、笑いながら彼はあたしの唇に、小鳥みたいなキスをした。

体感温度

早く終わらないかなあ。

模造紙の端を押さえながら、あたしは思っていた。

スイセイは、袖をまくってなんだか張り切っている。

せつかくふたりきりなのに、ほんとにこんな仕事だけなのかしら？

スイセイは、あの約束忘れちゃったのかなあ。

そんなことばかりかんがえているから、

仕事が雑になる。

「ねーじゅ、ちゃんと押さえて」

スイセイの声に、仕方なく模造紙の端をもう一度押さえなおした。

「式次第なんて、書かなくても分かるだろう？ って、顔してるな」
スイセイが、笑いながら言った。

「ちがうわ。

新1年生の担任の名前を真剣な顔で書き出してるスイセイなんて、
ちつとも面白くない

って、思っていたの」

「貼り出しておいてくれっていう、上からの指示だからね、仕方ないだろう」

「うっん、ちがうの。

スイセイには、あたしのことだけど考えてほしいの。

あたしの名前だけを呼んでほしいの。

いまだけでも」

スイセイは、あたしの顔をチラッとみて、
ちよっと首をかしげながら、出来上がった模造紙を丸めて、
マジックを片付けた。

それから、部屋の隅にある机と椅子のところにいくと、
「おいで」と、言った。

待っていたはずなのに、あたしはすぐにいけない。

スイセイが近づいてきて、あたしの手をとって連れて行く。
スイセイは椅子にすわると、あたしを膝の上に座らせた。
あたたかい。

目を閉じると、すぐにスイセイの唇があたしの唇を覆ってきた。
何度も何度もしたはずなのに、この瞬間はときどきする。

スイセイの舌を受け入れると、スイセイは丁寧にあごの内側まで
舌で愛撫する。

甘いため息が出てしまう。

それから、いつもの手順で、スイセイの右手があたしの胸の上に乗
った。

制服のベストの上からあたしの胸をやさしくなでて、軽く揉んでい
る。

服の上から胸を揉んで、あたしが恥ずかしがるのをスイセイが楽し
むのが、現在の最高の愛情表現だった。

「あれ？」

スイセイが、そう言ってあたしの顔をみた。
はずかしさのあまり、あたしは顔を背けた。
いつもとはちよっと違うの。

ひなた

窓辺はとてもあたたかい。

日差しが強すぎるからと、締められたカーテンだけど、それだけが理由じゃないのをあたしは知ってる。

あたしたちは先生と生徒なのに恋人なの。
そしてここは学校なのに、キスをしている。

スイセイの膝の上に抱かれ、キスを繰り返し、制服のベストの上から胸を揉まれている。

「今日のねーじゅの胸は、いつもより柔らかいね」
スイセイが言った。

あたしは顔が熱くなって、涙が出そうになった。
スイセイの指があたしの胸のてっぺんを目指して駆け上った。
そのてっぺんを親指と人差し指でつまんだ。
想像してたし、期待もしてたはずなのに、
あたしの体はびくんとしなつて

「ああ」と、自然に声が漏れた。
そのまま軽く引つ張られて、
「いやあ」

と、小さな声が思わず出てしまった。
胸の先をつままれてしまうのは、まだ、2回目だった。
しかも、今日はいつもと違う。

「乳首の位置がはつきりわかるね。
ベストの上からでも、簡単につまめるよ。」

前つまんだときは、Ｔシャツだったね」

前回っていうのは、もう半年以上も前。秋の初め。

スイセイの車の中でキスをしていたら、Ｔシャツの上からつままれてしまった。

あんまり突然で

「きゃあ」と、大声を上げてしまって、それ以上のことをスイセイはしてこなかった。

そのせいかな。

それで、スイセイはキスと服の上から軽く胸を触ったり揉んだりするだけにしてるたのかな。

ベストのボタンをはずされた。

りぼん結びしてあったボウタイをほどいて、ブラウスのボタンもはずされた。

その下には、レースがたくさん使われているキャミソールを着ていた。

キャミソールの上から、胸の愛撫は続いた。

下からすくうように胸を掌でつつんだり、先だけを指のさきでなでたりしている。

「かわいい色だね。

レース越しに見ると桜の花びらみたいだね」

下着越しだけど、はじめてみせたあたしは恥ずかしくて

「いや。いやあ」と、小さく返事した。

「アサからブラをしてこなかったの？」

スイセイが聞いてきた。

「だって、約束う」

あたしは、とても恥ずかしい約束をしていたのだ。

成績があがったら、胸にキスしてって、お願いしたのは、１ヶ月前の期末テストのときだった。

一生懸命勉強して、もちろん成績アップした。

胸にちゅってキスをされてみたかった。

それくらいの進展があってもいいような気がしたの。

あたしはこのあと、彼の手でキャミソールの前ボタンをいくつかひらいてもらって、

胸の先にちよつとだけ唇をあててもらうつもりでいた。

「レース越しに乳首が固くなってるのがわかるね。

とがった乳首が形も良くてきれいだなあ。

ねーじゅは、おっぱい自体は大きいのに、乳首は小さいね」

そういいながら、レース越しに乳首をつまんで指先で転がし始めた。

乳首っていう単語がとてもはずかしい。

じつと見られているのも恥ずかしくて我慢できない。

「ね、スイセイ。

お願い。早くキスして」

あたしは、恥ずかしさを我慢できずに、そう言った。

まるで、おねだりしてるみたいだったけど、それしか言葉がつかばなかったの。

少し冷たい

もう、あたしは恥ずかしくてたまらない。

キャミソールの上から、乳首をいたずらされて、乳首が硬くなっている。

ちょっと動くだけで、キャミソールのレースがこすれて変な気持ち。早くキスされてしまいたい。そうおもっていたの。

「じゃあ」

と、スイセイが言った。

いよいよねと、あたしは覚悟を決めた。

でも、違ったの。

スイセイはあたしを教卓の上に座らせた。

あたしとスイセイは向かい合うようになった。

はずかしいのはスイセイの目の高さにあたしの胸があること。

ベストを脱がされて、ブラウスも脱がされた。

上半身は、薄いキャミソールだけ。

肩のあたりがひんやりする。

スイセイは向かい合った状態で、あたしのおっぱいを両方一度につかんだ。

「おおきいねえ。」

やわらかいけど、張りがあって、乳首はツンと上向きだね。

んー。揉んでみないとわからないものだね。

左右で、若干大きさに違いがある。

左の方が大きいかな。

やわらかさも左の方がやわらかい。

右がおおきくなるように、重点的に僕が揉んであげよう」

観察されて、あたしはすっかりはずかしくなった。

左右の腕を胸の前でクロスさせて、胸を隠した。

「腕、邪魔だよ」

スイセイが笑いながらいった。

「だって、恥ずかしい」

「それじゃ、みることができないじゃないか」

「みなくてもいいの。お願い、早くキスして」

「みないでキスはできないだろ。」

腕をどけて」

でも、あたしは腕をどけることができなかった。

スイセイは、仕方ないなというように、ポケットからハンカチをだした。

チエツクの男のものハンカチは、バンダナと同じくらいの大きさがある。

それを斜めにたたんだ。

「どうしたの？」

あたしが、聞くと

「仕方ないから、こうしようかと」

と、言うや、あたしの腕を両方後ろに回して、手首を重ねて、そこをハンカチで縛ってしまった。

「あ、いやあ」

「どうしてもいやなら、解いてあげるよ。」

でもそれだと、自分でがんばっておっぱいを隠さないようにしなくちゃいけないよ。

できる？

それができないなら、おっぱいにキスするのは、もう少しオト

ナになつてからにしよう」

子ども扱いが、なによりくやしかった。

「平気。」

胸を隠さないようにするのはできるけど、

でも、スイセイが、せつかくしばつてくれたから、このままでもいいわ。

ちょうど、胸をそらせているし、よくみてもらえるもの。

キスだつてしてもらいやすいし」

見栄をはった。

はずかしい。

ほんとは、死ぬほど恥ずかしい。

でも、数分かまんすれば、胸にちゅつてしてもらえるはず。

「わかった。」

じゃあ、鑑賞させてもらうよ」

スイセイは、椅子に座りなおすと、あたしの足の間に割り込むように椅子を寄せた。

こんなはずかしい体勢はじめてだった。

両方の乳首を一度につまんだ。

「んああ」

言葉にならない言葉がでた。

「乳首に大きさは同じくらいだね。」

感度も、左右一緒くらいか。

両方一度に同じように固くなつてきたよ」

はずかしくて、首を左右にふるばかりのあたし。

「きつと、どちらも同じように未開発なんだなあ。」

乳房の大きさの違いは、少し自分で揉んだことがあるからじゃないのかな」

スイセイが言った。

あたしは、恥ずかしさのあまり、真っ赤になった。

「図星か」

「そりゃ、スイセイに触ってほしくて、想像しちゃうことがあるもん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482k/>

ねーじゅ

2010年10月8日23時30分発行